名著を大いに語る

名著はなぜ時代と地域を越えて読み継がれるのだろうか。時代の転換期を迎える今だからこそ、もう一度ひもといてみたい。今回は、教育学を専門に研究を進める明治大学の齋藤孝教授に、今後の「人と組織」を考えるうえで、役に立つ名著を語っていただく。

●語り手
齋藤 孝氏
明治大学文学部　教授

Saito Takashi_東京大学法学部卒業。同大学院教育学研究科博士課程を経て現職。専門は教育学、身体論、コミュニケーション論。著書に『声に出して読みたい論語』(草思社)、『現代語訳論語』（ちくま新書）、『齋藤孝教授の天声論語』（ダイヤモンド社）など多数。

『論語』

上に立つ者の心得を説いた名著
経験に即して読めば、新たな気づきがある

『論語』は、中国・春秋時代の政治家であり思想家であった孔子とその一門の言行録だ。『孟子』『大学』『中庸』とともに、儒教における「四書」の1つに数えられる。本書は、原文・書き下し文・現代語訳・語注という構成で、学術的、かつ個人的な解釈や解説を減らした簡便・的確な点が評価され、1963年の発行以来、版を重ねる。

訳注／金谷 治
岩波文庫　800円（税別）
2010年4月　第21刷刊行

孔子は、人材育成と国家運営に関して一家言を持ちながらも、人生の大部分は無冠の政治家であった。自分の理論を試す機会を願いつつ経験を重ねたが、政治改革に失敗。晩年には理想の政治の実現を後世にゆだね、教育に力を注いだ“苦労人”である。

『論語』が2500年の時を超えて名著であり続ける理由は、孔子の、数々の経験に裏打ちされた言行録だからであろう。

人の上に立つ者の心得を説く人間像からも多くの示唆

孔子は、国家をリードしていく政治家を育てようとしていた。その意味では、『論語』は、人の上に立つ者の心得を説いている。

孔子が貫く思想の１つに「信」がある。「信」は、信頼という意味でも使うが、言葉と行動が一致しているという意味もある。上司の言動が一致すれば、部下は上を信頼し、組織は安定する。「民は信無くんば立たず」をはじめとして、孔子は多くの場面で、信頼される人間の在り方を説いている。

「仁」についても、繰り返し語られる。「仁」とは他人への思いやりや寛容、人間の器の大きさを示す言葉だ。多様な人材をマネジメントしていく管理職には欠かせない素養の１つだろう。

孔子は、同じことを教えるにも、相手によって伝え方を変えた。正しく伝わる方法を常に考えていたからだ。また、自分の過失を指摘されると素直に感謝した。こうした弟子との交流の様子も全体にちりばめられており、そこからも多くの示唆を得ることができる。

経験に即して読めば自分へのメッセージとなる

『論語』を読む楽しみは、自分の

Text = 湊 美和　Photo = 有高唯之

経験が引き出される言葉に出合うことでもある。

学生に「『論語』から好きな言葉を３つ選び、その理由を過去のエピソードと合わせて説明せよ」という課題を出すと、それぞれが違う言葉を選ぶ。『論語』にはよく知られる言葉も多いが、自分の経験に即して読み返すと、何げない言葉にも引きつけられるからだ。

なかでも、学生にいちばん人気がある言葉は「今女（なんじ）は画（かぎ）れり」。「力が及ばないので先生の道には達せない」という弟子に対して、「力不足というのは謙虚に聞こえるが、それはいいわけである。まだ力を出しきっていないだけだ」と、気力のなさを指摘する言葉である。まだ世慣れない若者には響くようだ。

これが多くの苦汁をなめてきた社会人となると、選ぶ言葉が違ってくる。経営者や管理職であれば「中庸の徳たるや、其れ至れるかな」には、共感を覚えるだろう。

中庸とは、ちょうどいいところという意味で、絶妙なバランスを保っていく処世を讃えた言葉である。人の上に立って是々非々の判断を下す人物は、この中庸感覚の大切さを知っている。

『論語』は、限られた読書時間であっても、自分の経験に照らして玩味することで、新たな気づきがある。多忙なビジネスパーソンにはおすすめしたい名著である。

研究員の書棚から

人材開発のテーマから
当研究所研究員の兵藤郷が紹介します。

『ウェブで学ぶ――オープンエデュケーションと知の革命』

著者/梅田望夫、飯吉 透
ちくま新書　820円（税別）
2010年9月刊行

進化するウェブと教育コンテンツ 学びの場を見直す契機に

インターネットを利用して「学び、教える」というオープンエデュケーションの進化について説明した本です。

アメリカのマサチューセッツ工科大学が講義教材をウェブ上で公開したことから始まったオープンエデュケーションは、動画配信技術の進歩とともに全世界に広がりつつあります。私立大学の6分の1の学費で学位が取得できるオンライン大学や、ウェブ上で教科書をつくり無料で頒布するオープンテキストブックなど、本書ではオープンエデュケーションを利用した新たな動きも紹介されています。

社会構造の変化が速く、知識や技術の陳腐化も激しい現在、「社会人の学び」に対するニーズは大きくなっています。能力の向上を目的として国内の大学院に進学する社会人もいます。時間や空間の制約を超えて学ぶことができるオープンエデュケーションは、「社会人の学び」の可能性を広げるでしょう。しかし、ウェブ上に溢れるオープンな教材を独力で使いこなすのは容易ではありません。教材に詰め込まれた知識を自分の糧にするには、良い教材だけではなく、「学びのコミュニティ」が必要です。当研究所で2010年に実施した国内経営系大学院への調査でも、大学院で得られたものに「教員、学友との人的ネットワーク」を挙げた人が多くいました。社会人大学院は、教材だけでなく、「学びのコミュニティ」も提供していることがわかります。

社員の能力開発のためにどんな仕組みや場を用意すべきか。この本は、それを考える契機となる1冊だと思います。

Hyodo Sato_ 2008年11月より、当研究所に勤務。
主に能力開発に関する調査分析を担当。2010年は、
社会人大学院の能力開発機能に関する研究を行った。